

論文の和文要旨	
論文題目	ジェンダーと社会変化の人類学 ——メキシコ・ワステカ農村の事例から——
氏名	山本昭代

メキシコをはじめとするラテンアメリカ社会では、一般に女性と男性の性差が明示的であり、また性分業も強調されることが多い。その一方で経済開発や移民など、社会は急速な変化のなかにある。女性の賃金労働への参加をはじめとするジェンダーと社会変化との関係を取り上げた研究ではこれまで、社会変化の結果、女性の地位が向上したのか、男女が平等になっているのか、などの視点から議論されることが多かった。だが、「平等」や「地位の向上」を論じようとするれば、その西欧中心的な価値基準が問題となり、また女性と女性、男性と男性の間の立場の違いによる差異が見えにくくなる。女性と男性では、社会のなかでそれぞれに期待されるふるまい方や権利、義務として意識されるものが異なるが、それらはどのような立場の女性あるいは男性に対してのものかを問う必要がある。女性／男性という二元論的な枠組みを前提とした視点からでは、社会変化のなかで誰にとって何が、どう変わってきたのか、複雑に交差した人と人の差異の構造のダイナミズムを十分に解き明かすことはできなかった。

ここでは、社会の差異の構造のダイナミクスを読み解くために、女性／男性という性差よりむしろ、性差を含む社会の構造そのものを分析の対象とする。本論文で取り上げるのは、親と子をはじめとする親族としての関係である。そして、ジェンダー研究がこれまで培ってきた社会における差異の生成と変化を問題化するという視角によって、親族としての関係のあり方が社会的な状況の変化のなかでいかに変化しているかを探る。ジェンダーの視角で親族としての関係を読むことで、それまでの女性／男性という二元論を前提としたジェンダー分析では見えてこなかった社会の差異の構造の、多元的で動的な側面を明確にとらえることを可能にする。

メキシコ・ワステカ農村では近年、農業生産は低迷し、移民を含む外部経済への依

存度が高まった。人々の多くは都市に移動し、また一方で貧困政策をはじめ国家からの介入を強く受けるようになった。調査地となったサンタクルス村は、村内に幼稚園から高等学校まであり、交通や通信網も普及している一方で、村民のほとんどは先住民言語であるナワ語を日常語とし、一定範囲での自治を行うなど、先住民村落としての伝統や慣習を維持している。

サンタクルスにおけるジェンダーのあり方は、とくに 1940 年にエヒードが創設されて以降の土地所有への権利と、それと結びついた村での成員権と切り離して考えることはできない。村に住み、働く権利は、エヒードの土地の請求権と結びつき、またその権利をもつ人は基本的に男性とされ、さらに父親が村の生まれであるという出自と結びつけられた。だがそれは女性の立場から見れば、村への帰属は父親や夫などの男性を通じたものでしかないことも意味する。村の土地と成員権との結びつき方がジェンダーによって異なることは、社会経済的な変化のなかで移民などにも影響をもたらしている。

1980 年代以降は、村の人々の暮らしにおいて、国内都市への移民が大きな影響を及ぼすようになり、今日の若い世代の大部分は都市で働いた経験をもつにいたっている。都市では、移民者は女性と男性で、就く職業も余暇の過ごし方や給料の使い道も大きく異なっている。移民が一般化したことによって、それまで村の中では現金収入を得る機会がほとんどなかった若年者や女性が、ときには村で働く父親や夫の収入を上回る現金を手にもすることも可能になった。また若い世代が、親たちからの干渉を逃れることも容易になった。移民の動機はジェンダーと大きく関連し、また定住か帰郷かを選択する場面においても、ジェンダーは大きな要因として働いている。

親族としての関係をつくるうえでの重要なシンボルとしてここで取り上げたのは、「子ども」、「結婚」、「家」である。社会変化のなかでこれらのシンボルを巡る人々の実践はどのように変化し、またその意味はどう変わってきただろうか？

「子ども」のあり方については、学校教育の義務化、就学年数の長期化、産児制限、貧困対策の補助金政策など、国家の近代化政策が大きな影響を及ぼしている。かつて子どもは幼い頃から親の仕事を手伝うものと考えられていたが、近年では子どもは労働から遠ざけられ、親の保護と投資が長期にわたって必要なものとなった。子どもの位置づけの変化は、生殖に対する人々の考え方にも影響を与えている。子どもはなるべく少なく産むべきものと考えられるようになり、受胎は女性が自分で調整できるものと考えられるようになった。しかしそれは公的な医療機関による女性への強制をと

もなうものでもある。

サンタクルスにおいて社会経済的な条件が変化するなかで、「結婚」にかかわる実践と意味もまた、大きく変わってきた。かつて結婚は男性側が女性の父親に申し込むもので、娘を結婚させるかどうかは娘の父親が決めるものだった。また最初に結婚式などの儀礼を行ってからいっしょになるものとされていた。だが近年では、当人たちが勝手にいっしょに暮らし始めることが一般的になり、儀礼は後回しにされるようになった。

サンタクルスの人々の間で、結婚することは依然として重要な意味をもっている。永続的な結婚のきずなや夫方居住の原則など、規範的とされる結婚のあり方は認められている。しかし結婚のプロセスにかかわる人は交代し、結婚に際して理想とされるあり方と、現実に人々がとる行為の間の差はますます開きが大きくなり、規範的とされるあり方そのものも意味を変えてきている。

次に取り上げたのは「家」をめぐる親族としての関係である。家は、系譜上の関係と深く結びついている一方で、同じ家で共に暮らすことを通じて、家族としての親密な関係がつけられる場でもある。さらに家は、土地や材料を買い、「つくる」ものでもある。家の建設に投資することは、その家は誰のものか、誰が住むことができるかという意識と深く結びついている。

サンタクルスでは近年、家の造りが変化し、家の建設に多額の費用がかかるようになった一方で、女性も賃金労働に就いて現金収入を得る可能性が開かれたことから、女性が目に見える形で家の建設にかかわるようになった。夫婦の家の建設のために妻が夫ともに都市に働きに行ったり、都市で働く娘が両親の家の建設のために送金する例が目立ってきた。そのことは、同じ家に暮らす家族として当然期待されるものでもある。だが、夫婦の家に投資した妻、都市で働いて両親の家に投資した未婚の娘は、建設費用を出したことによって、その家に対する権利があると意識するようになる。なかでも未婚の娘は、結婚後は夫方の家に行くものとされていたが、自分の親との結びつきを深め、結婚後も親と同居したり、子どもの養育を自分の親に頼むなど、家を建てることで親との関係を変化させている。

さらに、サンタクルスにおいて親族としての関係の変化のなかで目立つようになってきたもののひとつが、離別女性や未婚女性がシングルマザーとして子どもを養育しているケースである。かつてサンタクルスでは、婚外子が生まれたり、子どもがごく幼いうちに父母が離別した場合、母親は子どもを自分の父母などに託し、自分は新しい相手と結婚して親の家を出て行っていた。だが都市への移民が一般化した 1980 年

代以降、女性が独身のまま、自分で子どもを養い続ける例が出てきた。近年ではシングルマザーは村の社会で周縁化されながらも、ひとつの現実的な選択として受け入れられるようになってきた。その背景にはもちろん、賃金労働に就いて自分で収入を得る機会が女性に開かれたことがあるが、同時に、社会変化のなかで、子どもの意味、結婚の意味が変化し、女性とその親の関係が変化してきたことにもよっている。

ここでは親と子、夫と妻など、親族上の立場を実践する場面に焦点を当て、社会変化のなかで女性や男性である人のあり方や、人と人との関係がどう変化しているかを考察した。ジェンダーは、外部からの政治的経済的な影響によって一方的に変化させられるものではなく、伝統とみなされる規範のあり方が社会変化への対応のし方に影響を及ぼしたり、理想とされる規範は認められながらも、社会的な条件の変化のなかで実践の面が大きく変わってきたりもする。さらに実践の変化は規範そのものにも影響を及ぼしている。

ラテンアメリカ研究において、女性の市場労働への参入や性分業、離婚や非婚の増加などは、これまでおもに「ジェンダー」の問題として扱われ、また社会変化との関連で論じられてきた。だが、そこで起こっている変化は、「女性の自立」や「女性への抑圧の再生産」などといった型にはまった評価の言葉で表せるような単線的な変化ではない。女性／男性、支配／従属といった二分法を前提とした視点からでは、本質主義を払拭し切れず、また変化のダイナミズムを十分に解明することができなかった。これまで「ジェンダー」として論じられてきたものは、社会の差異の構造のなかで、それぞれの立場にある人の権利や義務や倫理的規範などとして意識される中にある。社会の差異の構造を構築物として相対化し、その生成と変化を見据えるという、フェミニストによるジェンダー研究は、その視角を社会の構造自体に焦点を当てることにこそ、その発展の可能性がある。